
FINAL BATTLE!!!

X I C S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FINAL BATTLE!!!

【Nコード】

N0970I

【作者名】

XICS

【あらすじ】

高校生だったライカは、ある日謎の組織に拉致される。そこでライカは改造され、『人間兵器』と呼ばれる。ある任務中に、ライカは不慮の事故に遭い、ある少女と老人に助けられる。そこから、真の物語は始まる……。

今、俺は自由な生活をしている。この話は、俺が今の体を取り戻す前の話だ。まあ、聞いてくれ……。

……ふう。やっと終わった……。くそ……。何で俺はこういう事やってんだ……。

戦いの後は凄惨な光景だった。死体がそこら中に転がり、血が発する臭いが体中に纏わり付き、常人ならばここには数秒とも居られないだろう……。それにしても今日の敵は手強かった。久しぶりに傷を負った。しかし、俺の前では蠅同然だ。小賢しいんだよ。殺つても殺つても沸いて来る。民兵だろうが軍隊だろうがかかってこい！……。でも、俺はこんなことやるなんて望んでない。奴らの考えと俺の本音がせめぎあっている。

俺にはどうしても負けられない訳がある。え？何で負けられないって？まあ、落ち着け。後で話すんだから。

俺は一人のしがない高校生だった。今じゃあ、立派な21歳だ。あ、そういやあ名前言ってなかったな。俺はライカ。ライカールークールインだ。いや、ライカールークールインだった……。何故過去形にするかって？もう俺は、人ではないから……。

俺が高校1年だったとき、『破壊組織』っていう所に拉致されて、即刻眠らされて、気がつけば俺はベッドの上で寝ていた。俺の右腕に感覚がない……。そう思って右腕をみると、俺の右腕（肘から下の部分）がチェーンソーになっていた。愕然とした。叫んだ。泣いた。わめき立てた。でも、俺の周りには誰ひとりいなかった。周りをみると、まず目に飛び込んできたのは、刑務所みたいな殺風景な部屋だった……。

「……………ここは、どこだ？」

ベッド以外なにもないこの部屋に、俺は呆然と突っ立っていた。
「ヤット……………オキタヨウダナ」

どこからか、無機質な声が聞こえる。俺は辺りを見回した。しかし、何度も言ってるがここにはベッド以外なにもない。

「誰だ!？」

「ワタシハ、ココノジドウオンセイシステムノ『マーズ』ダ。チュウシヨウガオヨビダ。ハヤクジュンピラシテ、12カイノカイギシツヘイケ。ハヤクシロ。」

マーズはそう言つと、ブツンと音をたてて切れてしまった。

「準備をしるつて言われても……………」

辺りを見回してもなにもない事は分かつてる。ふと、俺はベッドの下に何か光る物を見つけた。

「……………これは……………」

引つ張り出すと、そこには迷彩服と義腕があつた。俺は直ぐに迷彩服に着替え、その中であつたカードキーを使い部屋を出た……………。

12階の会議室に着いた俺は、おそろおそろドアを開けた。そこには、俺と同じ迷彩服を着ている白髪のジジイがいた。

「入りたまえ。」

ジジイが偉そうに指図した。俺は正直ムカついたが表情には出さなかつた。

「君がライカ君か……………」

「……………はい。」

「私は中将のゲンだ。これから君は私達の組織と一緒に戦ってもらう。」

俺はこのジジイがどれだけ偉いかを知つて、言葉遣いを変えた。

「……………おっしゃってる意味が解りません……………」

ゲンというジジイは笑つて答えた。

「ハハハ、まだ解らないのかな？君は兵器に造り変えられたんだよ。これから君は兵器として、私達の指示に従ってもらって行動（戦争）してくれ。ああ、それと、君は人間を捨ててくれ。」

俺の頭はスパークしていた。俺が兵器？人間を捨てる？

「では、戻りたまえ。」

ジジイは無を言わさぬ口調で言った。俺はジジイに反論した。「ちよつと待つてくれ！何で俺があんたらのために働かなくちゃならないんだよ！何で・・・」

「ライカ君、いや、55号。私の話をよく聞いてくれ。」

55号・・・？俺の事を番号で呼びやがった！ゲンは喋り続ける。

「君は人間兵器と呼ばれる道具だ。私達の手となり足となり、組織のために尽くすんだよ。もし君が戦いで負けたら、君の胸に埋め込まれている爆弾が破裂する。もちろん、裏切ったときも同様だ。」

絶句した。言葉が出なかった。

「では、戻りたまえ。」

俺はゲンのいいなりになるしかなかった・・・。

俺は部屋に戻ると、自分の胸の部分に手をあてた。確かに胸の部分に縫合の跡があり、固いシコリもあった。

これが爆弾か・・・。と、ここで、無機質な声が響いてきた。

「55ゴウ、サツソクダガ、ニンムダ。」

任務・・・？怪訝に思いながらも、俺の足は12階の会議室へと向いていた。

会議室には、ゲンと、その他の軍服姿の人間がいた。ゲンを含める全員が冷たい目をしていた。

「これから、任務についての説明を始める。」

ゲンが厳しい口調で言いはじめる。

「13号、25号、そして55号。君達には隣国のB国に行っても

らう。人間兵器は、最早君達3人だけだ。その貴重な命を大事にしてほしい！」

「……俺達3人？これだけしかないのかよ!？」

「それでは、任務開始!! 屋上のヘリポートへ行くのだ!!」
俺達は、無言でヘリポートへ急いだ。

ヘリポートでヘリに乗ると、ものの10分でB国に着いた。B国は、戦場だった。土地は荒れ果て、難民が汽車に載って隣のC国を目指している。突然、俺達が持っていたトランシーバーから無機質な声が聞こえた。

「コンカインニムムハ、10キロメートルゼンポウニミエル、テキノキチヲハカイスルコトダ。シツパイハユルサレナイ。」

俺達3人は、敵のアジトに向かって走った。敵をばったばったと切り伏せ、血を浴びながら。どうやら俺は、頭も改造されているようだ。人を何人も殺しても何も感じない。寧ろ快感だ……。しかし、良心も少しだけ残っていて、それが働いてる。俺は何をやつてんだと……。

一人の悲鳴が聞こえた。25号だ。右足を切断されて、動く事ができないようだ。すると、25号の胸が光ったと思うや否や、25号が破裂した……。跡形もなく……。俺は凍りついた。しかし、13号は気にせず敵を蹴散らしながら突き進んでいった。

すると、いきなり13号が俺の視界から消え失せた。俺が気にせず突き進んでいると、突然俺の眼前が光った。13号が破裂した……。どうやら落とし穴のようだ、下は針山だった……。俺がこのまま突き進んでたらと思うと、ゾツとした。これで人間兵器は俺だけだ……。

無事(俺だけだが)に任務を終了して、本部に戻った。

「この度の任務の成功、見事だった。では戻りたまえ。」

ジジイ……。報酬は無しかよ!これも人間兵器の宿命かよ。使われるだけ使ってポイかよ。俺は心の中で毒づいて、会議室を後にし

た……。 ああ、こんな生活がいつまで続くんだ……。

こんな生活が2年続いたある日、また任務だ。俺は疲労困憊の体で会議室まで行った。この2年間、誰ひとり人間兵器はいなかったから、俺はフル稼働された。

「……今度の任務は何ですか？」

ゲンはこともなげに答えた。

「ナアに、今度の任務は簡単だ。J国の征圧している都市の見張りだ。頑張りたまえ。」

俺はヘリポートへ足を運んでいた。まあ、息抜きにはちょうどいいか……。この頃の俺は、この任務が一番危険になるとは知らなかった……。

J国に降りると、そこは軍服姿が沢山いた。何かが入っている袋を肩に背負って立ち、大型ダンプにわんさか載せている。そこら一帯は、死臭が俺の鼻をついた。きつと中身は敵兵の死体だろう……。すると、一人の兵士が俺に話し掛けてきた。

「お前の管轄は此処じゃない。もっと北の、F区だ。これが地図だ。頑張れよ、人間兵器君。」

俺は兵士の言った言葉にイラツときたが、此処で争いを起こすと面倒なのでそのままへりに乗った。

F区に到着した。しかし此処はまだ激戦区で、大砲の音や兵士の怒号が聞こえている。まだ戦いが終わってない……。

「何で戦いが終わってない所を見張るんだ？それに、征圧している都市じゃないのか!？」

すると、タイミング良くマーズの声が聞こえてきた。

「ソイツラハ、Jコクノハンラングンダ。イチオウ、セイアツハシタンダガナ、ヨソウガイダツタ。セイゼイシナナイヨウガンバレヨ。」

「

「……反乱軍？……まあ、俺には関係ない。正規軍がなんとかやってくれるだろう。」

F区の中心部にやって来た俺は、その事態に凍りついた。正規軍と反乱軍が、相打ちになっていた。簡単に言えば引き分けた。俺は溜め息をついてから、見張りをしようとした。そこで、まるで現場が見えてるかのようになり、マーズが言った。

「コレデ、オマエノシゴトハミハリダケダ。タダシ、キハヌクナ。」
最初から気を抜く事は考えてない。俺をナメてんのか……。

ぶらぶら歩いてると、正規軍の姿が見えた。しかし、よく見ると、ナイフで磔にされていた。もちろん、死んでいた。

「……ぶらぶらもしてられないな……。」

しばらく歩いてると、また正規軍の軍服が見えた。今度は、ちゃんと生きてる。すると、兵士は俺に向かって何か話し掛けてきた。

「やあ、55号。君の活躍は耳にしているよ。」

俺も有名になったな……。そう思っていると、兵士はいきなり俺の胸に銃を向けた。

「あんた……。一体何を……。」

兵士は、恐ろしい事を口にした。

「俺は反乱軍だ！！正規軍の奴がきていた服を殺して奪ったのさ！！」

俺は攻撃しようとした……。しかし、

「死ね！！」

そう言われ、俺は5発弾を胸に撃ち込まれた。俺は吹っ飛び、壁に頭を打ち、意識を失ってしまった……。

「……きいて……。起きて……。」

「ハッ！！」

俺は目を覚ました。ここはベッドの上だった……。辺りを見ると、一人の老人と一人の少女がいた。

「良かった……。無事だったな。」

「ここは……。何処だ？」

その質問は老人ではなく、少女が答えた。

「ここはおじいちゃんの診療所よ。あなたが倒れていたから助けたの。」

俺は老人に深々とお辞儀をした。

「ハハハ、そうかしこまるな！」

老人は俺の様子が可笑しかったのか、笑って答えた。しかし、老人はいきなり真剣な口調になった。

「ところでお前さん、何で胸に爆弾が埋め込まれていたんじゃ？」

「……。え！？何で知って……。？」

老人は、またすぐにいつもの口調で喋り始めた。

「まあ、爆弾は俺が抽出したかな！！ハハハハ！！」

そう言っつて、老人は外へ出た。しかし、俺は耳を疑った。爆弾は抽出した！！？これで自由の身だ……。組織から解放された……。俺は嬉しくて泣いた。少女も、俺を嬉しそうに見ていた。しかし、手術後なので胸が痛くなった。俺は泣きながら胸を抑えてベッドに寝込んだ。

「だ……。大丈夫ですか？」

少女が心配そうに見てくれている。

「ああ、大丈夫だ。」

俺は痛みを堪えて言った。しかしこの少女、俺の右腕を見ても何も言わない。本当は怖いのかも……。

「……。なあ、あんたはこの腕を見ても怖くないのか？」

「いいえ、何も怖くないですよ！こんなことで人を差別しちゃいけませんから。」

少女は、澄んだ声で言った。俺は感激した。

「……。ありがとう。俺は『人間兵器』って言われて、いつも

人から疎まれていた。あんたが初めてだ……。俺の事を怖がらないのは。」

少女は、可愛く笑って部屋を出た。そのあと、急に眠気が俺を襲った。俺は深い眠りについた……。

俺が目を覚ましたのは10時間後だった。ちょうど、少女がスー
プを持って来た。俺は少女に質問した。

「なあ……。あんたの名前は？」

「アタシはマイ。マイ＝マリア＝ルミエル。あなたは？」

「俺は55号。番号で呼んでいいよ。」

「ダメですよ！人には必ず名前があるんですからね。本名を教えてください。」

「……。ライカ。ライカ＝ルーク＝ルインだ。戸籍上ではな。」

「素敵な名前ですね。こんな素敵な名前なのに、何で番号で呼んでいるの？」

「さっきも言った通り、俺は『人間兵器』って奴だ。『それ』は、番号で呼ばれるのが基本だ。最初は俺は番号で呼ばれるのが嫌だった。でも次第に慣れてきちゃって、もうどうでもよくなってきたんだよ。」

「じゃあ、これからは名前で呼び合いましょう！もうライカさんは、『人』なんですから……。」

俺はこの言葉をきいて、更に胸が熱くなった。

「……。ああ、マリア。短い時間だけど、これからよろしく。」

「はい！よろしく願います！」

マリアは、微笑んで答えた。その笑顔は、とても可愛かった。
「じゃあライカさん、スープ置いときますね。よろしければ飲んで下さい。」

そう言って、マイは部屋を出た。そうだ。俺はライカなんだ。これからは人間を捨てる必要はない。これからずっと、此処で暮らそ

うかな・・・と、スープを飲みながら思った。

夜が明け俺が目覚めると、胸の鈍い痛みが残っているまま、俺は洗面所に行こうとした。しかし、玄関が何か騒がしい。玄関を覗いてみると、そこにはマイと正規軍の姿があった。

「やめて下さい!!!」

「うるさい!!我々の所へ来るんだ!!」

「私を何処へ連れていくんですか!？」

「お前の国は戦争で負けたんだよ!!!だから我々の国の奴隷になるんだ!!お前は女だから、慰安婦にでもしてやるよ!!!」

「.....!!!?そんな.....。アタシまだ14歳なのに.....
.....」

「うるさい!!早く来るんだ!!お前はまだ若いから、タップリと可愛がつてくれるだろうなあ!!!」

「そ.....そんな.....。イヤ!!絶対イヤア!!!」

正規軍の奴がマイの腕を無理矢理引いている!!俺は凍りついた。早くマリアを助けなきゃ.....。俺は走り出していた。

「へへへへ.....」

「.....イヤアア!!!放してえ!!!」

「やめろお!!!」

正規軍の奴は、俺を睨んだ。

「.....なんだ、テメエは!？」

俺もまげじと武器を出した。チェーンソーの刃がキラリと光った。正規軍の兵士は怖じけづき、尻尾を巻いて逃げた。マイはその場で脱力し、へなへなと地面に膝をついた。俺はマイの肩を叩いた。

「大丈夫か!?マイ!!!」

マイは俺の方を向いたが、マイは泣いていた。よっぽど正規軍の兵士が怖かったんだろう。

「.....怖かったよ.....」

マイが俺に抱き着いてきて、声を出して泣いた。老人はまだ寝ていた。

「そうか、怖かったか。でも、もう大丈夫だからな。俺がついてるからな……。」

「……うん、ライカ君がいれば大丈夫だよね……。」

マイは笑いながら言った。俺はマイを苦しくない程度に抱きしめてやった。

「ライカ君の胸、暖かいね……。」

俺はマイを部屋に連れていき、マイの添い寝をしてやった（あ、別にいかがわしい事はしていないぞ）。と、その時、ドアを開ける音がした。そこには、老人が立っていた。

「ハハハハ、2人とも若いのお!!」

マイは顔を真っ赤にしてベッドを出た。

「……!! 違うの!! おじいちゃん、これは……。」

そして、俺に小さな声で礼を言って、マイは彼女の部屋へ駆け足で戻って行った。

「ハハハ、お前さん、これは一体どういう事だ?」

俺は、さつき玄関で起こった出来事を話した。老人は数回頷いた。

「……そうか、お前さんには感謝せんとな!! 儂の孫を助けてくれて、ありがとな。」

昼をまわった頃、マイが俺を訪ねてきた。

「……ごめんなさい。アタシと一緒に寝てなんて言ったから……。」

「気にするな。お爺さんも許してくれたから。」

「……そう。」

暫く無言の時間が続いた。それに気まずさを感じた俺は、口を開

いた。

「……………マイって、まだ14歳なんだな……………」

「……………うん。」

マイは言葉を付け足した。

「……………さつきはありがとうございます。」

俺はマイに礼を言われて、少し顔を赤くした。マイの顔も赤かった。その顔が、とても可愛かった。

前置きで言った言葉は勝手ながら撤回させてくれ。俺は、人になった。もう人間兵器ではない!!!ちゃんと感情もある。もう人間を捨てない!!!

マイと出会って、半月が経った。俺は、マイの祖父の診療所で働いている(居候だな)。チェーンソーは俺のベッドの下に置いとぎ、義腕を使って生活している。

「ふう……………疲れた……………」

俺は夕方になるといつもクタクタになって、ベッドに直行する。

「何か飲み物でもいる？」

マイが、俺の前に現れて尋ねた。俺はすぐに寝たかったが、喉の渇きには勝てなかった。すぐに何か一杯欲しかった。

「水を一杯欲しいんだが、持ってきてくれないかな。」

「うん!今持って来るね!」

「あ、また襲われるかもしれないから、俺もついていくよ。」

「……………アリガト。」

マイは顔を赤らめて言った。

俺はマイと一緒に、ミネラルウォーターを取りに行った。俺はそれをコップ3杯程飲んだ。しかし、マイは何故か飲もうとしない。心なしか、マイの顔が赤い。

「おい、マイ。大丈夫か?熱でもあるのか!？」

「いや、大丈夫、大丈夫だから。」

いや、どう見ても大丈夫ではない。何故か呼吸が荒い。俺は、マイのおでこに手をあてた。

「……………!!!熱があるじゃないか!!!」

「ごめんなさい、アタシ、子供の頃から病弱なの……………」

俺はマイにミネラルウォーターを飲ませ、俺のベッドに寝かせた。熱は40位だろうか。いや、これだと更に危険だ。

「……………ごめんね、ライカ君。いつも迷惑かけて……………」

「いや、いいつて。それよりも、解熱剤は何処にあるか知ってるか?」

「入口付近の棚の、上から二番目の引き出しに入って……………ゴホツ、ゴホツ!!!」

まずい……………。咳まで出てきた。しかし、偶然同じ棚に総合感冒薬(子供用)が入っていた。それをマイに飲ませ、寝かせた。仕方がないので、俺は床で寝ることにした。

「……………早く元気になってくれ……………」

まだ夜中だと言うのに、俺は目を覚ました。外が異様に騒がしいのだ。俺が外を覗くと、外は大変な事になっていた。正規軍による略奪が始まったのだ!金品は勿論、女子供も連れさらわれる。このままでは、マイが……………。俺は、老人とマイを無理矢理起こした。

「マイ、じいさん、大変だ!!!正規軍の奴らが来た!!!早く逃げよう!!!」

「逃げるって行っても、何処へ逃げるんだ?」

「とにかく、早く金を持って逃げよう!!!家から出るだけでいいから!!!」

「おじいちゃん、ライカ君、裏口から逃げよう!!!」

俺達は、有り金を全て持って裏口から逃げた。すぐに、正規軍の奴らが来た。

「おい、金か女子供はいるか?」

「ダメだ……。夜逃げしちまつてる。」

「くそ……。次をあたるぞ!!!」

正規軍の奴らは帰っていった。俺達は再び診療所に戻り、またぐっすりと寝た。

翌朝、俺の胸の痛みはほとんど消え、マイの風邪はほとんど治っていた。

「ありがとう、ライカ君。ライカ君が気付いてなかったら、今頃アタシは……。」

「いやいや、お前さんには感謝せんとなあ。」

「あ、いえ、どういたしまして。」

俺は照れ笑いをしながら言った。

「あ、ライカ君の顔、真っ赤だよ。」

「まるで林檎じゃわい。ハハハ!!!」

俺とマイは、老人につられて笑った。ああ、皆で笑いあったのは何年ぶりだろうか。俺は、このひと時が天国のようだった……。

「何!? まだ55号と連絡がついてないだど!?!」

12階の会議室で、中將のゲンが怒鳴った。

「はっ!!!おそらく、トランシーバーが壊れて……。」

「黙れ!!!一刻も早くF区にアレを向かわせるのだ!!!そして55号を連れ戻せ!!!刃向かう場合は殺せ!!!」

「はっ!!!」

こうしてゲンは、アレをヘリポートへ向かわせた……。

ある夜中俺が寝ていると、マイが俺の部屋を訪ねてきた。

「マイ、どうしたんだ?」

「眠れないの。また軍隊が略奪に来ないか心配で……。」

「……怖かったのか……。分かった。今夜だけ俺の傍で寝ていいぞ。」

「……アリガト。でも……。」

「でも……なんだ？」

「今夜だけじゃなくて……。これからずっと……。ライカ君の傍で寝たいの。」

俺は心臓が跳ね上がった。こんな経験は今までなかった。俺は顔が真っ赤になっていた。自分でもわかる位、頬が熱くなっていた。

「マイも、俺と同じ位頬が赤くなっていた。」

「ダメ……かな？」

「い……。いいけど、俺の部屋にはベッドは一つしかないぞ！」

「それでも……。いいわ。ライカ君と一緒に居たいの。」

「おいおい、こりやまさか……。いや、俺の考えすぎだ！しかし、俺は念に念を入れて質問した。」

「……。マイ、俺の事、どう思ってる？」

すると、マイはクスクスと笑い出した。なんだ、俺の考えすぎか……。嬉しいような、淋しいような気持ちがあった。

「何言ってるの？アタシは『想っている』の……。」

俺は今度こそ分かった。まさか……。

「もう……。分かったでしょ？アタシは……。ライカ君の事が……。」

もう、分かっていた……。しかし、マイの話の邪魔はしなかった。

「……。好きだったの……。」

マイは半ベソになっていた。しばらく、沈黙が続いた。俺は、心を決めた。

「……。俺で良ければ……。」

「……。え！？」

マイの顔に満面の笑顔がこぼれ落ちた。と同時に、沢山の涙も。
「ありがとう!!!本当にありがとう!!!こんなアタシなのにつ、
ウツ、ウツ、ウエーン……。」

俺は、泣いているマイをいつまでも抱きしめていた。しかし、今
度は強く。

「俺も……そんなマイが好きだ。」

「え?今なんて……。」

「いや、何でもない。」

「ねえ、ライカ君……。」

「なんだ?」

「これからもずっと、ずーっとよろしくね。」

「ああ、よろしくな。」

「うんっ!!!」

俺とマイは、そのあとすぐに眠りに落ちた。

あの夜が明けて、俺はマイと一緒にいる時間が増えた。食事も一
緒、出掛けるのも一緒、寝る時だって一緒だ(さすがに入浴は無理)
。マイは俺と居ると、安心しているというか、嬉しいというか、そ
んな感じた。しかし、俺は違った。俺は、マイ以外の誰かの視線を
感じた。

「しっ!!静かに!!」

「え?」

「誰がいる!?!」

「また軍隊?」

「いや、違う。軍隊じゃない別の奴だ。」

すると、ヤツは俺達が気付いた事を知ったのか、攻撃を仕掛けて
きた。サバイバルナイフが2本、俺達のところへ飛び込んだ。俺と
マイは、寸でのところでそれらをかかわした。

「誰だ!?!」

俺は、義腕をチェインソーと取り替え（略奪のときから護身用として持ち歩く事にした。）、攻撃体制に入った。

「55号!!お前を連れ戻しに来たぞ!!」

そこに現れたのは、黒服でサングラスをかけ、サバイバルナイフを何百本も持っているエージェントだった。

「貴様、ゲンの手先か!？」

「ああ。とにかく、お前を連れ戻せと命令されてる。おとなしく来い!!」

「嫌だ、と言った場合は？」

「おとなしく殺されてもらう!!」

そう言つて、エージェントはナイフを3本投げた。しかし、俺のチェインソーには全く効かない。

「次は俺の番だ!!」

俺はチェインソーを振り回し、エージェントに突撃した。エージェントは徐々に後退していく。

「くそ………。このままでは埒があかない。ならば………。」

「そう言つてエージェントは大きくジャンプし、マイの真後ろに着地した。そして、マイの首にサバイバルナイフを突き付けた。俺とマイは凍りついた。」

「55号!!この小娘がどうなつてもいいのか!？」

「………!!マイ!!!!」

「ほほう、マイと言うのか……。確か、奴隷にしそこねた奴の人だと聞いたな……。」

「………アタシを、どうするの!？」

「うるせえ!!!小娘は黙つてろ!!!」

エージェントが一喝すると、マイは縮こまってしまった。そして、また俺の方へ向き直った。

「どうだ?このマイって言う小娘と交換つてことで、戻るのか!？」

「先にマイを返せ!!」

「……言う事を聞かない様だな。ならば……。」
そう言ってエージエントは、マイに暴力を振るった。

「……!? キャア!!! ヤメ……ッ……!!!」

「……!!! テメエ、やめろお!!!」

「ハハハ。すぐ殺したら楽しみが無くなっちまうからなあ!!!」

マイは、殴られ、蹴られ、悲鳴も出せない状況だった……。俺は、その状況に耐え切れずに口を開いた。

「分かった!!! 分かったから!!! 戻る!!! 戻るからもう止めてくれ!!!」

「ほほう、やっとその気になったか。だがな……。」

「……!!!?」

「一回で言うことを聞かなかった罰だ!!!」

なんとエージエントは、マイの服を引き裂いたのだ!!!

「……!!!? イ……イヤアアアア!!!」

確実にマイをレイプしようとしている……。

「ハハハハ!!! いい身体してるなあ!!!」

「テメエ!!! マイに何て事しやがるんだ!!!?」

俺は、自然とエージエントが使っていたサバイバルナイフをエージエントに投げていた。サバイバルナイフは、エージエントのこめかみに命中。エージエントは吹っ飛び、血を流していた。勿論、死んでいた。

「マイ!!! マイ!!! 大丈夫か!!!?」

マイは痣だらけで、痙攣していた。俺は、マイを急いで診療所へ運んだ。老人は驚いた顔で俺を見た。

「一体、何があった!?!」

「お爺さん、すみません! 俺、マイを守れなくて……。」

「別にお前さんを責めはしない。やった奴が悪いんだからな。」

「いいえ、俺に責任があります!!! 本当に……。」

「少し、黙っててくれ。治療に集中できん。」

そう言うと、老人はマイの傷ついている部分を触り始めた。

「……………大丈夫。骨折はない。当分、動けんが……………」
「……………俺のせいだ。俺がアイツに闇雲に突っ込んだから、マイは……………」

「心配するな。お前さんは責めないよ。何度も言うが、やった奴が悪いんだからな。お前さんも、マイと一緒に休め。」

「……………ありがとうございます……………」

「あ、休むのは後だ。それじゃ、マイに包帯を巻くのを手伝ってくれ。」

「……………どこに巻くんでしょうか。」

「マイは全身を怪我しているからな、まあ、全身だな。」

「……………!!?!?全身!?!?」

「なんだ？嫌か？ビックリしたか？」

「い……………いや……………ちよつと抵抗あるかなあ、と…
……………」

「何で抵抗あるんだ？」

「この子、女の子でしょ!?俺にはちよつと……………」

老人は、俺の言った事が可笑しかったのか笑い出した。

「ハハハハハ!!!お前さんも結構純粹じゃわい!!!さて、包帯を用意してくれ。」

「は、はい!」

俺は包帯を用意して、老人に渡した。マイに包帯を巻きながら、俺は老人に言った。

「あんたの名前、きいてなかったな。教えてくれよ。」

「俺の名前……………俺の名前は、ガンフ。これからは、ガンフ爺さんと呼んでくれ。」

「ガンフ爺さん、これからもよろしく。」

「ああ、よろしくな!」

俺達は、黙々とマイに包帯を巻いていた。

「ここからは、お前さんがやってくれ。」

「え!?!?」

俺が驚いたのも、無理はない。なんせ、マイの胴体の部分だったから……。

「ガンフ爺さんがやればいいでしょ!？」

「いや、マイは、俺に身体を触られるのを嫌っている。この前擦りむいた時も、『おじいちゃんはいいいから!!自分でやるから。』って言われてのお……。」

「……俺でも同じだと思うけど……。」

「いいじゃろ。お互い身体を許した仲なんじゃろ？」

「……!!?そんなこと、してないよ!!!」

俺達が話していると、うるさかったのかマイが起きた。

「……此処、どこ？」

「マイ!!!お前、大丈夫か!?!」

「ライカ君……。……ごめんね、また心配かけちゃって……。」

「おお、マイ!!やっと起きたか!!」

「……おじいちゃん!?此処って、診療所？」

「ああ、ライカ君がマイを運んできたんじゃ。」

「……アリガト。ライカ君……。」

マイはそう言つと、また顔を赤らめた。

「それじゃ、俺は疲れたからもう寝るわい。じゃあな。」

「うん。お休み、おじいちゃん。」

また、俺とマイの二人つきりになった。

「マイ……。ゴメン!お前を、守れなくて……。」

「ううん、大丈夫。アタシの所に来るなんて、予想もしてなかったから……。」

「……怖くなかったか？」

「怖かったけど、アタシ、この時は泣いてなかったよね？」

「……ああ。」

すると、俺が言葉を言い終えるや否や、マイが俺に抱き着いてきた。

「ウワッ!!!」

俺は、驚いて尻餅をついた。マイの顔を見ると、泣いていた。

「…………でも、今は泣いていいよね？」

「…………いいよ。一杯泣いても。」

マイは、俺の胸の中で思いつ切り泣いた。そんなマイを、俺は力強く抱きしめてあげた。

「今度こそ、今度こそは、マイに怖い思いをさせないからな…………。マイを守ってやるから…………。」

俺も、マイと一緒に泣いていた。

数日後、俺とマイは買い物に出掛けていた。マイの傷（身体・心）も殆ど癒えた。俺達は楽しく笑いあっていた。

「ねえ、今日の晩御飯何にする？」

「カレーなんか良いんじゃないか？」

「うん！カレーにしようか。」

俺達は、まるで新婚夫婦の様だった。こんな時間がずっと続けば良いなあ…………。

しかし、現実には甘くない。俺は、またマイ以外の視線を感じた。

「…………まただ。」

「え？どうしたの？ライカ君…………。」

「またエージエントが来た!!」

マイは、もううんざりという表情だった。

「とにかく、俺について来い。」

「うん。分かった…………。」

そう言っただ俺は、マイの手を引っ張って全速力で走り出した。

「ヒヤッ!？」

「俺、中学・高校で陸上部だったから、走るのには自信あるんだ！」

「は…………速いよお！」

「しっかり掴まってる!!」

俺とマイは全速力で走った。敵も追いついてこなかった。家に着けば、きつと無事だ。俺はそう思い、マイと一緒に風になった。

息も切れ切れで家に着くと、ガンフ爺さんが怪訝な表情で俺達に尋ねた。

「一体どうしたんだ？」

「敵に……追われてた。」

「もうダメ……疲れた……！」

どうやら、逃げ切れたようだ。しかし、いつ襲ってくるか分からない。油断は禁物だ。

「さあて、昼飯でも作るかあ。」

「ライカ君、料理できるの？」

「俺も作れるぞ、失礼な。いつも作ってもらってるから、お礼だ。」

俺はマイのエプロンを借りて、台所に立った。そして、我ながら見事にできたハンバーグを皆で食べた。

「美味しい……！すごいね、ライカ君！」

「まあな。」

「お前さんは料理もできたのか……！頼もしいのお。」

「ライカ君のエプロン姿、似合ってたよ！」

「そ、そうか。ハハハハ……！」

「ライカ君、ご馳走様。スツゴク美味しかったよ！」

「ああ、ありがとな！」

俺は柄にもなく照れていた。調子に乗って夕食にカレーを作ってみたが、これの評判も良かった。

「ライカ君、アタシの仕事、取るつもりでしょ。」

「い、いや、そんなことないよ。マイが作ってくれた方が、俺のより美味しいよ……！」

「ホント？ライカ君に言われると、嬉しいな。」

「そうか。」

そして、お互いに笑いあった。しかし、俺はつねに外の方に神経を集中させていた（でも、マイの話はちゃんと聴いている）。いつ

奴らが襲ってくるか分からないから……。

その日の夜、俺はずっと起きていた。マイは、スヤスヤと寝ている。その寝顔が、月明かりに照らされてとても綺麗だった。

俺は狙われている。その事をすっかりと肝に命じ、時々コーヒーを啜りながら、夜通し起きていた。結局、俺はこの日は2時間しか寝なかった。

「どうしたの、ライカ君？ 顔色悪いよ。」

この日の朝、俺はマイに言われて自分の顔を洗面所で見た。自分で言うのも何なのだが、かなり酷かった。頬はこけ、目にクマができていた。マイに心配されるのも無理ない。

「マイ、心配してくれてありがとう。でも、もう大丈夫だから。」

「本当に？ 途中で倒れたりしない？」

「ああ、倒れたりしないよ。」

「でも、心配だなあ……。何かあったら、遠慮せずに言ってね。」

「ああ、分かった。」

マイの話は聴いていたが、目は虚ろだった。この日も、また次の日も、俺は2時間程しか寝なかった。しかし、ついに限界がきた。

「ライカ君……。どうしたの？ さっきから変だよ。」

俺は、マイに言われても気付かなかった。意識なんて何処かに飛んでいた。

「ねえ、ライカ君……。」

マイが俺を揺ると、俺はバタリと倒れた。

「……………!!! ライカ君!!!? ねえ! ライカ君!!!?」

俺は自分のベッドで目覚めた。まだ頭かボオツとしている……。

「ああ、良かった……。ライカ君、いきなり倒れたからビックリしちゃった。」

「……俺は……。一体……。」

「もお、何かあったら遠慮せずに言っただけ、って言ったのに……。おじいちゃん、寝不足が原因だって言っただよ。もお、我慢は体に毒だよ！」

「マイ……。ゴメン。俺って、何時間寝てた？」

「まだ3時間しか寝てないよ。もうちょっと寝てていいよ！」

「……。ああ。でも、ちょっと飲み物を取ってきて良いかな？」

「アタシがいくから大丈夫だよ。」

「うん、でも、マイにこれ以上は迷惑かけたくないから……。」

そう言っただけ、俺は部屋を出た。俺はコップに、少しの麦茶を注いだ。それを一気に飲み干すと、またベッドに戻って寝た。

「マイ、お休み。」

「うん、お休み、ライカ君。」

俺は眠りにつこうとしたが、横になってから何故か身体が動かなくなかった。

“あ……。俺って、相当疲れてたんだな……。”

心の中でこう思ったが、寝返りがうてない。身体が石のように動かなくなつたのだ。しかも、身体がピリピリと全身から痛みを発している。

“……。!!!これは痺れ薬だ!!!”

口も痺れていて、言葉を出せない。マイに助けを呼べないのだ!!!

ガシャン!!!

俺の部屋の窓ガラスが、突然割れた。そして、此処から黒服が現れた。俺は言葉を出せない。

「……。!!!」

すると、窓ガラスが割れた音を聞いたマイが駆け付けてきた。

「……。!!!あんだ、エージェントでしょ!？」

「小娘には関係ない！！！！55号はもらって行くぞ！！！！八八八八八！！！！」

「そうはさせない！」

そう言ってマイは猟銃をエージェントに突き付けた。そして、躊躇いもなく腹に3発撃ち込んだ。エージェントは悲鳴をあげ、白く光って破裂した。マイは光で目が眩みながら、俺の所へ駆け寄った。

「大丈夫！？ライカ君！！！」

しかし、俺は口が痺れていて言葉が出せない。マイは俺を、ガンフ爺さんの所へ連れていった。ガンフ爺さんは、俺の状態を見てすぐに異常が分かった。

「こりゃ、薬で痺れとる。何か飲まされたか？」

しかし、俺の口も痺れていて言葉を出せない。俺は、ウーウー唸っているしかなかった。

「お前さん、口も痺れとるな……。まあ、一週間もすれば治るぞ。それまで点滴を打っておいてやる。」

“はあ、一週間も点滴生活かぁ……。”

俺は暫く口がきけないので、心の中で思うしかなかった。突然、俺に睡魔が襲ってきた。俺はそいつに勝てず、深い眠りについた。

“……………なんだ？俺の口の中がやけに甘い。唇には柔らかい感触が……………。何だ？”

そう思っって目を開けると、俺の目にマイの顔がアップで写し出されていた。

“……………！！！”

「あ、ライカ君！！……起きちゃった？」

俺は、マイに何をされたのか解らなかった。まだ口は痺れていて言葉は出せない。それにしても、俺の口の中がやけに甘い。幸い喉は動くので、俺の口の中の甘い物は飲み込む事ができた。

「じゃあね。ライカ君、お休み。」

マイが俺に寄り添って寝た。俺に、再び睡魔が襲ってきた。またまた俺は、深い眠りについた……。

翌朝俺が起きると、マイの姿がなかった。しかし、台所からマイの鼻歌が聞こえたので、俺は安心して再び眠りにつこうとした。ふと、俺は気付いた。唇が重くない……。自分の意思で、口を開けるようになったのだ！俺は試しに、マイに向かって声をかけてみた。「マイ、おはよう。」

ビックリした様子でこちらを見たマイは、俺の所へ駆け寄ってきた。

「おはよう、ライカ君！！やっと口がきけるようになったんだね！やっぱり、おじいちゃんが出してくれた薬草は効くね！」

「……？薬草？俺、こんなもの飲んでないけど……。」

「アタシがライカ君が飲みやすいようにして飲ませたんだよ。この薬草、普通に飲むととっても苦いの。でも、前もって噛んでおくと甘くなるんだよ！！」

「……ふーん……、って、え！！？もしかして、マイが噛んで俺に……。」

「……うん。口移して飲ませたんだ……。」

俺とマイの顔は、真っ赤になっていた。

「……そ、そうか。あ、ありがとな。」

「……ダメだった？」

「い、いや、治してもらったんだから、ダメなわけ無いだろ。」

「そう……。でも、ライカ君の唇、とっても柔らかかったよ。」

「……！！？そ、そうか？マイの唇も柔らかかったけど……。」

「えっ……！！？」

「いや、なんでもないよ。」

お互いに恥ずかしくなってしまったので、俺は話題を変えた。

「……昨日は助けてくれて、ありがとな！」

「いいよ。アタシだって必死だったし。ライカ君を……奪わ

れたくなかったから……。」

「えっ!？」

「いや、なんでもないよ!!」

更にお互いに恥ずかしくなってしまうた。

「じゃあ、点滴のパック取り替えてくるから。待っててね。」

マイは、奥へ行つてしまった。

「口移し、かぁ……。あの甘い物はマイが咀嚼した薬草で、柔らかかった物はマイの唇かぁ……。」

俺は、床に伏せながら呟いた。もしかするとあの薬草は苦くなくて、マイが俺と口づけしたいが為に……。いやいや、何考えてんだ、俺!ここは、薬草は苦かったと考えておこう。そうすれば、気が楽になる。俺も、マイも……。

一週間が経ち、俺の身体は脚以外は動くようになった(それでも腕の動きは覚束ない)。しかし、一人では物を食べる事さえ誰かの援助が必要だ。でも、マイが俺のために、献身的になっている。

「ライカ君、お粥できたよ!」

「ありがとな。食べさせてあげるつもりだろうけど、もう大丈夫だよ。もう一人で食べれる。」

そう言つて俺は、匙を手にした。しかし、身体がまだ痺れていて、手に力が入らない。匙はそのまま、俺の手をすり抜けて、虚しい音をたてながら床に落ちた。

「ほら、無理はいけないよ!!ライカ君は病人なんだからね。」

マイは匙を拾つて、水でそれをよく洗つてから、俺にお粥を食べさせた。

「はい、アーンして。」

「ちよっ……。俺、子供じゃないんだよ!!」

「いいから、口開けて。」

俺はマイにお粥を食べさせてもらっていた。まるでボケ老人だ・

。俺は自分が情けなくなり、顔を真っ赤にした。

「ゴメンな、マイ。こんなにしてもらって・・・。」

「ううん、いいよ。アタシもライカに沢山してもらっているから、そのお礼だよ！」

お粥を食べ終わった俺は、再び眠りにつこうとした。

「じゃあ、お休み。マイ。」

「お休み、ライカ君!!!」

そう言っただけで、俺の頬にキスをした。

「・・・!!!?」

「フッフ、ビックリした?じゃあね、また後でね。」

マイは笑って部屋を出た。俺は放心状態になった。あの柔らかい感触が、再び蘇った。

“そうか、マイは俺の事が好きだからキスをしたのか。”

そう思ったかった。

今更こんな所の話はしたくないが、『破壊組織』内は騒然としていた。12階の会議室で、ゲンがまた怒鳴った。

「一体エージェントは何をやっておるんだ!!!」

すると、ゲンの前に軍曹と思われる人物が現れた。

「中将!!!報告します。55号は2人のエージェントを殺害。未だにF区に滞在中とのことでありませう!!!」

「新手的エージェントを3人向かわせる!!!今度は連れ戻さなくていい!!!殺してこいと伝えておけ!!!」

「はっ!!!」

そして、軍曹は会議室を出た・・・。

あれから2週間経って、俺は完全復活した。俺は早速、マイの労いの為に料理を作った。

「おいし〜い!!」

「マイには世話になったからな。」

すると、口がきけるようになった俺に、ガンフ爺さんが尋ねる。

「しかしお前さん、何で痺れたんだ?」

「多分、俺が飲んだ麦茶に薬が入っていたんだと思う。」

「でも、ライカ君が元気になって本当に良かったね!」

「マイ、今まで助けてくれてありがとうとな。」

「どう致しまして!」

俺達は、再び幸せな時間を過ごした。すると、奥の居間にある電話が鳴った。

「儂が出る。マイ達は食べてなさい。」

ガンフ爺さんが居間に行った。数分後、ガンフ爺さんが戻ってきた。しかし、何故か焦っている。

「急患だ。かなり酷い怪我をしているらしい。マイ、手術の準備をすぐに運ばれてくるらしい。」

「うん、分かった。」

そう言って、二人はすぐに手術室へ向かった。10分後、患者が運ばれてきた。俺は、見ていただけだった。

「お前さんは自分の部屋に行ってくれ。ここは儂らの仕事だ。」

俺は言われた通り、自分の部屋に行った。手術室の中では、何が起こっているか分からなかった。1時間後、ガンフ爺さんとマイが帰ってきた。

「手術は!?!」

「大丈夫だ、成功したわい。」

患者は二人いて、それぞれ少年と少女だった。二人はまだ麻酔が効いているのか、眠っていた。彼らは全身に包帯が巻かれている状態で、とても痛々しく写った。

「運ばれてきた時の状態はどうだった?」

「とても酷い怪我で、意識がなかったの。」

「……そうか。まだ戦争は終わってないのか?」

「残念ながらそうみたい……。」

マイは余程疲れていたのか、白衣のまま俺のベッドへ直行した。俺も、マイと一緒にベッドへ直行した。

翌朝、俺とマイはガンフ爺さんを手伝っていた。患者の点滴パツクを取り替えたり、採血をしたりしていた。

「患者の容態は？」

「今の所は安定しているわ。心電図も異常ないし。」

すると患者が唸り声を発した。少年の方からだ。マイはいち早く駆け付けた。

「大丈夫ですか？」

「う……ん……。だ……大丈夫……。」

「ダメですよ！まだ動いちゃ。」

「おゝい、マイ！どうしたんだ！？」

「この子が動こうとするの。押さえ付けておいて。」

俺は、少年をきつく押さえ付けた。彼は暴れたが、腕っ節は俺の方が上だ。彼は暴れるのを諦め、じっとした。そして、少女の意識も戻った。

「良かったあゝ。二人とも無事で。」

少女はまだ言葉を発しなかった。余程ショックな事があったのだろう。涙も流していた。マイは少女に語りかけた。

「ねえ、あなた。何があったの？泣いてちゃ、あなたの素敵な顔が台なしだよ。」

少女は固く口を閉ざしていたが、マイに優しく諭されて口を開いた。

「……黒い背広を着た男の人が三人いて、『55号は何処だ！？』って言ったんです。アタシは『知りません』って言ったのに、いきなり殴りつけられて、その時一緒に居たサイガ君も一緒に……ウツ……ウツ……。」

俺とマイは凍りついた。しかし、マイは動揺を隠し、別の質問をした。

「……………そのサイガ君っていう子は？」

「……………隣のベッドに居る男の子。」

「あなたの名前は？」

「ミオよ。ミオ＝ミリア＝サイヴェリア。」

「マイは今度、サイガという少年に話し掛けた。」

「あなたがサイガ君？」

「うん……。サイガ＝シード＝グリーンズ。」

「アタシはマイ。マイ＝マリア＝ルミエルよ。ほら、ライカ君も！」

「え！？俺も！？」

仕方なく、俺は軽く自己紹介をした。

「俺はライカ。ライカ＝ルーク＝ルインだ。短い時間だけど、よろしく！」

「うん、よろしく。」

返事をしてくれたのは、サイガだけだった。ミオは俯いていた。余程人見知りが激しいというか、シャイな性格なのだろう。

「じゃあ、また後で来るからね！ライカ君、行こう！」

「あ、うん。」

俺は、マイに連れられて部屋を出た。ふと、ミオの顔が見えた。

俺の目には、ミオは心なしか顔を赤らめているように見えた。

俺とマイは昼食をとっていた。そこで俺達は、あの患者について話していた。

「……………まさか俺が原因だったとは……………」

「自分を責めないで、ライカ君……………」

「……………俺が55号だって、正直に言った方がいいかな？」

「うん……………。アタシもそうした方が良いと思う。あの子達は、訳が分からず殴られたんだから……………」

「それじゃ、行ってくる。」

俺はサイガとミオが居る部屋に入った。部屋は静寂に包まれている。俺はその静寂を破った。

「あ、あの、ちよつと君達に話があるんだ。」

サイガは俺を食い入るように見つめた。ミオは相変わらず下を見て俯いている。

「君達は、『55号は何処だ!?!』って言われたんだね?」

「は、はい。それが?」

俺は今になって言葉に詰まった。言おうか、言つまりか、俺の頭の中でせめぎあっていた。

「ライカさん。どうしたんです?」

俺はサイガの声で我に返った。よし、もう言うしかない!

「その……55号が、俺の事なんだ。」

俺がそう言った途端、サイガは信じられないといった表情で俺を見て、ミオは顔をあげた。

「何であなたが此処にいるんだ?」

サイガが辛うじて口を開いた。

「俺は組織を抜け出してきた。だから、俺は追われている……」

「ウソよ!!!」

突然、ミオが叫んだ。俺とサイガは驚いてミオをみた。

「嘘よ!!!絶対嘘よ!!!アナタがあんな野蛮な男達の仲間だなんて!!!」

「おい、ミオ、落ち着け!ライカさんは『組織を抜け出してきた』って言ったじゃないか。」

しかし、ミオはサイガの言葉を聞かず、泣き出してしまった。あまりに突然の告白に困惑したのだろう。

「ライカさん、何で俺達が此処に運ばれてきたか知ってます?」

「え?それは、殴られたからじゃ……。」

「俺は、ね。」

「じゃあ、ミオは?」

「レイプされかけた。幸い、やられる前に警察が来たから無事だったけど……。それでも、服を破られてかなり痛め付けられたけど。」

「……そうか。ミオは何歳だ?」

俺は顔を真っ赤にして、マイと一緒に部屋を出た。

「なあんてね、冗談ですよ、冗談。ハハハ!!!」

なんだ、冗談か……。ビックリした……。俺は胸を撫で下ろして、自分の部屋に行った。

俺は、ミオの存在が気になっていた。何で俺と話すと、顔を赤らめるんだ？俺の見間違いか？

「ライカ君、入るよ。」

俺はマイの言葉で我に返った。

「ねえ、ライカ君。ミオちゃんと何を話してたの？」

「……。あの子、殴られただけじゃなくレイプもされかけたらしい。だから泣いてる、って。」

「そう……。アタシと同じね。」

「かわいそうだな……。」

マイの瞳は、潤んでいた。同じ事をされたから、ミオの気持ちが解るのだろう。

「でも、これからケアしていこう！そうすれば、ミオもきつと立ち直る筈だ。」

「じゃあ、その役目はライカ君に任せるよ。だって、アタシを助けてくれたから……。」

「……。よし、分かった。やるよ。」

こうして俺は、ミオの心のケアをすることになった。

その日の晩、俺はサイガとミオに病院食を持って行った。

「美味い！こんな美味しい料理食ったの初めて!!」

「サイガ達は、此処に運ばれる前は、何食ってた？」

「俺達は戦争の孤児だからさ、ろくなもん食ってないよ。酷い時は5日間何も食わずに、ミオが栄養失調で倒れた時もあったな。」

「……。いつから孤児なんだ？」

「俺が7歳の時から。ミオは6歳。じゃあ、俺トイレ行ってくる。」

「身体は大丈夫なのか？」

「うん、大丈夫。」

そう言っつて、サイガは部屋を出た。俺はミオと話しはじめた。

「なあ、ミオ……」

「来ないで！！あんな野蛮な男の仲間なんて来ないで！！」

ミオは泣いてしまった。俺は黙って引き下がるしかなかった。

俺はマイの所に行った。マイは俺の沈鬱な表情に反応した。

「どうしたの？何か問題でもあるの？」

「大有りだよ……。組織にいた人間を拒んでいるんだ。」

「じゃあ、アタシが話してみるね。」

そう言っつて、マイは病室に行った。ミオは、まだ泣いている。

「どうしたの？ミオちゃん。」

ミオは泣きながら答えた。

「……嫌いだ、ライカさんなんて、嫌いだ！！」

「どうして彼の事が嫌いななの？」

「組織の人間だから、アタシにまた悪さするかもしれない……」

そう考えると怖いのだ。

「彼は、そんな人じゃないんだよ。連れさらわれそうになったアタシを助けた事があるし、病気になったアタシを必死に看病してくれた事もあるし、レイプされかけたアタシを助けてくれた事もあるんだよ。ライカ君って、結構優しい人だよ。」

「え！？……そうなんですか！？や……やだ、アタシ、ライカさんに失礼な事しちゃった……」

そう言っつて、ミオはまた涙を流しはじめた。

「泣く事ないよ。きつと許してくれるよ。」

「あ、あと……」

「ん？何？ミオちゃん。」

「アタシ、ライカさんの顔見ると、なんだかドキドキして、顔が熱くなるんですよ……。病気でしょうか？」

「うーん、病気じゃないと思うから、気にしなくて良いと思うよ。」

じゃあ、アタシはもう戻るから。お休み。」

「はい！マイさんも、お休みなさい。」

マイは知らんぷりをしていたが、解っていた。

「ライバル出現、ってところかな？あ、ライカ君！！！」

「どうだった？」

「ちゃんと心を開いてくれたよ。ライカ君に謝りたいって。」

「そうか、良かったあ……。」

「あ、後……。」

「なんだ？」

「あの子、ライカ君に惚れてるよぉ！！！」

「え……え！！？」

「それじゃ、お休みなさい、ライカ君！！！」

「あ、ああ、お休み！！！」

俺はどぎまぎしながら、ベッドに直行した……。

俺は、夜中になっても眠れなかった。隣でマイがすやすやと寝ている。どっちをとるべきだろうか？いや、絶対にマイだろう。しかし、やっと心を開いたミオが、再び心を閉ざしたらどうしよう……。しかし、俺は考えているうちに眠ってしまった。

……暖かい。なぜだか暖かい。それに、体中が重い。目を開けて見ると、マイが俺に抱き着いていた。

「……！！？わぁっ！！！」

俺は素っ頓狂な声をあげてベッドから落ちた。

「い……一体何のつもりだ！！？」

「ライカ君を奪われなくなかったの……。ゴメンね、驚かせちゃって……。」

「い、いいよ。まだミオが惚れてるって限らないから。」

「いいえ！絶対惚れてるよ。」

「と、とにかく、俺から離れてくれ。動けないから……。」

マイは俺から離れた。

「じゃあアタシ、サイガ君達の様子を見て来るよ。」

「あ、俺も行くよ。」

俺達が病室に行ってみると、サイガ達はまだ寝ていた。

「病院食、持ってきましたよ〜!!」

俺がそう言つと、サイガは真つ先に起きて、いち早く飯にありつこうと した。その様子を見て、マイは微笑んだ。

「フッフ、可愛いね。」

サイガが起きると、ミオも起きはじめた。ミオは、目の前に俺が居たので顔を真つ赤にした。

「ラ・・・ライカさん!!?あの、き、昨日はすみませんでした!」

「いいよ、気にしなくて。ちょっとビックリしたけど。」

「ご飯、持ってきましたよ。ミオちゃん、昨日あまり食べてなかったでしょ。いっぱい食べてね!」

二人は、ちゃんと回復しているようだ。俺は、自分の部屋に戻るうとした。しかし、ミオの声が俺を呼び止めた。

「待ってください!」

「ん?どうしたんだ!??」

「私達は孤児なので、もう帰る所がありません。これからは、此処に居させてください!」

「・・・・此処の責任者の爺さんに相談してくる。」

俺はガンフ爺さんに、さっきミオが話した事を言った。爺さんは、賑やかになつていいだろうと言つて許してくれた。

「此処に居ていいって。良かったな!」

「本当ですか!?ありがとうございます!」

「怪我の方はどうですか?」

「まだ痛むけど、もう歩けます。」

俺達が話していると、突然扉を叩く音が聞こえた。と、ガンフ爺さんの声が聞こえた。

「すぐに診察の準備をしてくれ。」

どうやら、患者らしい。マイはすぐに診察の準備をした。勿論、俺も手伝った。患者は、20代後半の男だった。頭が痛むらしい。しかし、患者が現れた途端にミオの様子が変わった。ガタガタと振るえ、目を大きく見開いた。サイガが怪訝に思っ、ミオに尋ねた。「どうしたんだ!? ミオ!?」

「い……嫌。」

「え!? なんだって?」

「イヤアアアア!!! 来ないでええええ!!!」

突然、ミオが泣きだした。まさか……。俺は患者に尋ねた。

「お前、エージエントか!?」

「何の事ですか? エージエント? 何を言っているんですか?」
すると、ミオが男に向かって叫んだ。

「こいつよ!!! アタシをレイプしかけたのは!!!」

男は凍りついた。男は、鬼の形相でミオに近付いた。

「テメエ、此処に居たか!!! もう一度やってやるうか!？」

「イヤアアア!!! 止めてえ!!!」

「やめるお!!!」

叫んだのは、サイガだった。サイガの腕は、何故か膨張している。「テメエは……この前のクソガキじゃねーか。殺されたいのか!? あ!!!?」

エージエントが言い終わるや否や、サイガは膨張した腕でエージエントを掴み、遠くに投げた。エージエントは悲鳴をあげながら飛ばされ、グシャリという音と同時に息絶えた。

「もう大丈夫だよ、ミオ。あいつは、いなくなった。」

サイガは、その大きな腕でミオを包んだ。ミオは、声をあげて泣きだした。

「ここはひとまず出ましょ。ライカ君……。」

「ああ、そうだな。」

俺達は、一旦部屋を出た。サイガとミオの二人の時間をつくってやりたかったから……。

「アタシ達と一緒にだね！」

「そうだな。状況まで似てるな。」

俺達は、自然と手をつないでいた。マイの手は暖かった。マイは笑って俺と話している。そんな時間が、俺にはとても愛おしかった。

しばらくして俺が昼食を持って行くと、サイガとミオは笑いながらお喋りをしていた。サイガの腕は、元に戻っていた。俺はさっきの腕の膨張について、サイガに尋ねた。

「なあ、さっきの腕って、一体……。」

「ああ、それね。俺は特殊な民族の生まれなんだ。」

「特殊な民族？それと何の関係が？」

「ああ。この国の民族は二種ある。一つは、『シルバ族』。ミオはこの民族だ。この民族は普通の人間だ。そしてもう一つは『バーストバルク族』だ。俺はこの民族だ。この民族は好戦的で、怒ると腕が膨張する特殊な民族だ。でも……。」

「でも……なんだ？」

「俺達の民族はシルバ族に迫害され、ついに10年前民族紛争が起こった。そこで俺とミオが出会った。俺とミオの家族は死んだ。最初は俺はミオの事が嫌いだったけど、一緒にいるうちに民族なんかどうでもよくなって、こうしてずっと一緒にいる。」

「アタシ達は、ずっと国中を歩いた。風邪を引いたり、栄養失調になったり、いろいろとあった。でも、人の優しさに触れる事はなかった。アタシ達に優しくしてくれた人は、ライカさんとマイさんだけです。ありがとうございます！」

「どう致しまして。ミオ、さっきは大丈夫だった？」

「はい、もう大丈夫です。」

「そうか、それじゃ、ここに昼食を置いてくから。」

そう言って、俺は部屋を出た。二人は体だけじゃなく、心まで回

復しているようだった。ベッドから出る日も近いな……。

夕方になり、俺とマイが夕食を持って行くと、二人は寝ていた。それも、手をつなぎながら。二人の寝顔は、とても可愛かった。

「もうこの二人は、恋人みたいだね。」

「そうだな。」

俺は二人分の夕食を、テーブルにできるだけ音を立てないように置いた。二人は、とても幸せそうだった。

「じゃあ、アタシ達は部屋に行きましょう。この二人の幸せな時間を崩したくないから……。」

「羨ましいな、あの二人は。」

「本当にそうだね。アタシ達も、あんな風になりたいな。」

「マイ、もうなってるじゃないか。」

「えっ?」

マイは顔を赤くした。俺の顔も、赤くなっていた。

「俺達、もう恋人同士だろ?俺がマイの事が嫌だったら、俺はあんな返事はしなかったよ。」

「……うん!そうだね、アタシ達、もう恋人同士だよね!」

俺はマイの手を握っていた。マイも、俺の手を握り返していた。

俺達は、サイガとミオと同じくらい幸せだった……。

サイガとミオが起きたのは、それからすぐだった。

「おっと、昼寝のつもりが寝過ぎしたな……。あ、ミオも起きたか?」

「うん、サイガ君。あ、手つないで寝ちゃったね……。」

サイガとミオが顔を赤くしているところへ、俺達が入ってきた。

「体の調子はどうですか?」

「あ、もう大丈夫です。体も痛くありません。」

「夕食を置いていたから、食べてくれ。」

「やっとな飯だ!!」

サイガはいち早く夕食に飛びついた。

「もう戻ろつか。ライカ君。」

「ああ、そうだな。」

俺達が戻ろうとしたとき、ミオがマイに尋ねた。

「マイさんって、ライカさんの事どう思ってるんですか？」

マイは言葉に詰まったが、考えた末にこう答えた。

「ひ・み・つ！」

「え〜！？そんな〜！！ずるいですよ〜！！」

「じゃあ、何か困った事があつたら言つてね。」

そう言つて俺達は、そそくさと部屋を出た。

「何か感づかれているよな。正直に言つた方がいいかもしれない。」

「ダメよ。ミオちゃんはまだライカ君の事を諦めてないのよ。」

「だからといって、そのまま話さないのも残酷だろう。」

部屋に戻ると、俺達は話し合っていた。しかし、話は平行線だった……。と、そこで、ナースコールが鳴った。俺達が見に行くと、サイガとミオの姿はなかった。夜の風が、部屋の中に吹き付けていた。しかし、此処は窓は開かないようになっていた。よく見ると、窓が破られていた。俺とマイは凍りついた。

「マイは外に居ろ！俺が見てくる！」

そう言つて俺は、チェーンソーを持って外へ出た。何か嫌な予感がする……。

俺が外へ出ると、すぐに縛られているサイガとミオが見えた。

二人はさるぐつわを噛まされて、ウーウー唸っている。二人は俺に向かつて首を大きく振った。二人の足元をよく見ると、土の色が微妙に違う。俺は、落とし穴があるとすぐに分かった。俺は後ろに回り込み、二人の縄を解こうとした。しかし、すぐにミオがエンジニアに連れさらわれた。サイガは、縄が解けたのですぐエンジニアに飛びついた。そして、エンジニアを膨張した腕で殴り、たた

き付けた。エーゼントは内臓破裂で息絶えた。

「大丈夫か!!!?」

俺は、ミオの縄を解いてやった。さるぐつわはサイガが取ってやった。ミオは泣き出し、サイガに抱き着いた。サイガも、躊躇う事なくミオを抱いていた。

「お熱い所申し訳ないけど、戻ろうか。」

俺が言っても、二人の耳には入ってないらしく、俺は一人でトボトボと退散した……。すると、すぐにマイが駆け付けてきた。

「あの二人は?」

「あそこで熱くなってるよ。」

「そう……。もう言っつていいかもね。」

「あの二人が落ち着いてからな。」

マイは、遠くの二人に声をかけてみた。

「二人共、戻らないと風邪引いちゃうよ。」

遠くから返事が聞こえてきた。俺達は先に部屋へ戻った。二人が戻ってきた時には、PM10時を過ぎていた。

翌日、サイガとミオの体は完全に治っていた。

「やっと退院だ!!!」

サイガは嬉しそうに跳びはねていた。サイガがトイレに行くと、マイはミオを呼び出した。

「何ですか?話つて。」

「ミオちゃんは、ライカ君の事どう思ってるの?」

「……。それは、頼りになるなあ、と思ってます……。」

「ミオちゃん、この前、『ライカさんを見ると胸がドキドキする』って言っつてなかったっけ?」

「え……。え!?そ、それは……。」

「ライカ君の事、好きでしょ?」

「と、とんでもありません!!!ア、アタシが好きな人は……。」

「だあれ？」

「……サイガ君です……。」

しばらく沈黙が続いた。と、そこに、サイガが帰って来た。

「マイさん、ミオ。どうしたんです？」

「ほら、ミオちゃん、チャンス!!」

ミオは腹を決めたのかサイガに話し掛けた。

「あの……、サイガ君……。ちょっと話があるの。」

「ん？なんだ？」

「アタシ、サイガ君の事が……。好きだったの……。」

「え！？マジで！？おいおい、両思いかよ……。」

「え！？今なんて……。」

「俺も、好きだったってコト!!」

「なんだ……。早く言つてよ。ウワアアン!!」

ミオは笑いながらサイガに抱き着いていた。顔では笑っていたが、涙は止まっていなかった。

「ハハハ、ミオは泣き虫だなあ。」

「そんな事、ないよ、うっ、うっ!!」

ミオはいつまでもサイガを抱いていた。

「さて、悪いけどベッドを片付けてくれるかな？」

「分かりました。」

「俺も手伝うよ!!」

「ライカ君!!じゃあ、ベッドを分解してね。」

俺達（4人）はベッドを片付けた。そして、俺達の共同生活が始まった……。

その日から俺達は、寝食を共にした。風呂も、男同士・女同士でそれぞれ入った。サイガとミオは、マイが寝ていた部屋で寝た。

「賑やかになつたね。ライカ君!!」

「そうだな、うるさい位だなあ。」

「あの二人、元気いっぱいだからね。」

「じゃあお休み、マイ。」

「お休みなさい、ライカ君……。」

俺達は互いに寄り添って寝た。隣の部屋からは、もうサイガとミオの寝息が聞こえてきた。これで何回目だろうか、こんな幸せな時間がずっと続けばいいと思った。

次の日、俺達は買い出しに出掛けていた。幸いそれは無事終了し、何事もなく家に帰る事ができた。

「今日は、俺が料理作るよ!!!」

言い出したのは、サイガだった。

「サイガ君、料理できるの?」

「ああ、できるさ。ミオと一緒に料理作った事あるから。なあ、ミオ。」

「うん!サイガ君の料理、結構美味しいよ!!!」

「へえ〜!じゃあ期待して良いんだね。」

「任せといて下さい!!!」

暫くして、サイガが料理を運んできた。食べてみたが、味もなかなかのものだった。

「すごく美味しいよ!!!サイガ君!!!」

「皆にそう言ってもらったら嬉しいよ。」

食事の最中にミオがマイに質問した。

「あ、そういえば、マイさんってどこで寝ているんですか?」

「ライカ君の部屋だよ。」

「でも、ライカさんの部屋にベッドは一つしかなかった筈……。」

「二人で一緒に寝ているの。ライカ君が許してくれたからね。」

「あ、もしかしてライカさん、マイさんの事好きでしょ?」

「え……え!!!?」

話の矛先が俺に向かってきたので、俺はビックリした。

「そ……それは……。」

「ミオ……。一体何を……。」

「アタシね……。サイガ君が好きなんだけど、ライカ君も好きなんだ……。」

そして、俺の唇にミオの唇を近付けた。

「うわわっ、サイガにしてやれよ！！此処にはマイもいるし……。」

「……。アタシよりマイさんの方が大事なの？」

「……。！！？そ、それは……。」

「やっぱり……。マイさんの方が大事なんだ……。ウツ、ウツ……。」

大変な事になった……。ミオが泣いてしまった……。俺が泣かせたのか！？いや、そうだ。俺が泣かせてしまった……。

「……。どうしたの？ミオちゃん？」

まずい！マイが起きてしまった！しかしミオは何でもないと風を黙っていた。しかし、黙っては居ずにすぐに俺の所へ向き直った。

「……。嘘泣きですよ。慌てているライカさんも可愛いですね！じやあお休みなさい。」

俺はひとまず安堵した。しかし、口づけをしようとしたのは本気だろう。俺が寝ようとする、ミオの睨り泣く声が聞こえた。今度は本気で泣いている。

「……。どうしたの？ミオちゃん？」

するとミオは、マイに向かって飛び込んできた。

「ワアアアアン！！アタシ……。アタシ……。」

「あらあら、泣かないの、ミオちゃん。どうしたの？」

「またライカさんに酷い事しちゃったああああ！！！」

「なあに？」

「アタシ、ライカさんが嫌がってるのにライカさんにキスしようとしたの……。それで……。ライカ君アタシから遠さがって……。」

「

「いきなりしようとしたたら、誰でもビックリするよ。気にしないで!!それに、サイガ君爆睡してるから今サイガ君としちゃえば?」
「・・・はい。」

そう言っつてミオはサイガにキスをした。

チュツ。

頬ではなく、唇にしたのだ。それがミオとサイガのファーストキスになった。

「ミオちゃん、良かったね!」

「・・・うん!」

「じゃあお休み!!」

「お休みなさい!」

そして、起きている者は俺だけになった。退屈に思っていると、何処からか声がした。

「ライカ君・・・起きてる?」

「ああ、起きてるよ。何だ?マイ。」

「本当に羨ましいね・・・あの二人の関係って・・・。」

「・・・キスしたいのか!??」

「そうじゃなくて。アタシは、ライカ君と一緒にいる事が一番の幸せなの。」

「・・・そうか、ありがとうな。」

「でも・・・。」

そう言っつてマイは、俺の横に寄ってきた。

「やっぱり、ライカ君と・・・キスしたいな・・・。」

「・・・良いぞ。」

俺達は、唇を合わせた。今度は頬ではなく、唇に唇を合わせた。

マイのキスは優しくかった。俺も、マイに合わせて優しくした。キスをした後は、お互いに暗闇でも分かる程に顔が真っ赤になっていた。

「じゃあ、お休みなさい。ライカ君・・・。」

「ああ、お休み!」
こうして俺は、今度こそ眠りについた。時計を見ると、午前0時を過ぎていた……。

次の日、俺達は部屋の掃除をしていた。中心となっている人は、マイだった。

「ライカ君!!この袋は外に出して。ミオちゃんは、雑巾がけをお願い。サイガ君は窓を拭いて。」

マイの的確な指示の下俺達は掃除をやった。他人の命令に従ったのは何年ぶりだろうか……。すると、すぐにマイの叱責が飛んできた。

「ライカ君!!ボサツとしないの!!」

「あ、ああ、分かった。そんなに怒るなよ……。」

俺がもしもマイと結婚しても、こうやって尻にしかれるのか……。いや、いや、何言ってるんだ、俺!まだ結婚できないだろう!それに、こんな事考えただけでも恥ずかしい!

「ライカさん、どうしたんだい?顔、赤いよ。」

「い、いや、何でもないよ……。」

そう言ってる俺は、再び黙々と掃除を続けた。

「はぁ……。」

「どうしたんですか?ライカさん。昨日の事考えていたんですか?」

「いや、昨日の事は気にしてないよ。」

「昨日はごめんなさい!!アタシ、ライカさんの気持ち考えずに……。」

「大丈夫だよ。もう気にしてないから。」

「本当ですか!?!」

「ああ。」

俺がそう言うと、ミオが俺に抱き着いてきた。

「お……おいおい。サイガにはしなかったのに……。」

「サイガ君にはもうしました。サイガ君、アタシがこうしたら顔真っ赤になりましたよ！」

「悪いけどミオ、掃除ができないから退けてくれ。またマイにどやされるのは御免だからな。」

俺がそう言つと、ミオは素直に退けてくれた。俺は再び黙々と掃除を続けた。いつまで経つても終わらない……。

「俺、ごみ袋だしてくるよ。」

「いつてらっしやい！」

俺は埃だらけの体で外に出た。しかし、何故か空気が張り詰めている。すると、俺の横から銃弾が飛んできた。俺は、間一髪で避けた。エージェントだと、すぐに分かった。

「くそ！エージェントか!？」

「よく分かったな。」

俺は義腕を取り外してチエーンソーに付け替え、エージェントに襲い掛かった。しかし、エージェントは小銃を持っており、迂闊に近付けば撃たれる。ふと、エージェントが小銃をしまった。チャンス！！そう思ったが、突然背中に激痛が走った。ナイフが一本刺さっていた。俺はくぐもつたうめき声をあげて倒れた。

「く……そつ……！」

俺は力を振り絞りチエーンソーにチエーンソーで襲い掛かったが、腹を撃たれてまた倒れた。

「ああああああ……！」

これまでか……。万事休すだった。しかし、小銃を持っていたエージェントが突然倒れた。目の前には、サイガがいた。サイガはビククリしている。

「大丈夫ですか!?!？」

「見ての通り大丈夫じゃねーよ……ウゲツ!!！」

「大変だ!!!早く連れて行かないと……！」

「そうはさせねーぞ!!!」

エージェントは俺の首にナイフを突き付けていた。

「死ねえ！！！」

「ライカさん！！！！危ない！」

ザグツ！！！！

俺、死んだのか……。そう思って目を開けて見ると、サイガの背中にナイフが突き刺さっていた……。

「サ……サイガ？」

サイガは大量出血で倒れた。エージェントは、苦虫を噛み潰したような顔でサイガを見た。

「今度こそ殺す！！！！死ねえ！！！！」

エージェントがそう言った瞬間、俺の何かがブツリと切れた。気が付くと、エージェントの血まみれの四肢が転がっていた。俺はすぐに、虫の息になっているサイガを診療所へ連れていった。俺とサイガは共に治療を受けた。幸い俺達は助かったが、サイガはまだ意識が戻らない。

「サイガ君……。早く起きてよ……。いつまで寝てるの？ウツ、ウツ、ウツ……。」

ミオは泣き出してしまった……。

「ライカ君……。どうしたの？」

「エージェントに襲われた。サイガは俺を庇って……。こうなった。」

ガンフ爺さんは深刻な表情をしている。

「血は足りている筈だから、もうじき起きるよ。安心しなさい。」

「……はい。」

「くそ、俺がちゃんとしてれば……。」

俺は、何もできない自分が情けなかった。俺はついに、涙を流してしまった……。堪え切れない涙が、どんどん溢れていった。

「ウワアアアアア！！！！畜生！！！！畜生！！！！畜生！！！！畜生！！！！」

俺は、うずくまって泣き叫んだ。

「ライカ君……。」

その様子を見ていたマイは、うずくまっていた俺を立たせて俺を抱きしめた。

「可哀相なライカ君……。大丈夫だよ。もう淋しくないからね……。サイガ君はきつと生きてるから……。」

マイは、俺の頭を撫でながら優しく言った。俺は呆然と立ち尽くした。涙は、いつの間にか止まっていた。

「悲しい・悔しいのは皆一緒だから、ライカ君一人がいつぺんに背負っちゃダメだよ……。ライカ君は一人じゃないから……。アタシ達も一緒だからね……。」

俺はマイの言葉に胸が熱くなり、啜り泣いた。

「さあ、後はおじいちゃんに任せましょう。」

マイはそう言って、俺達を部屋から出した。俺は部屋で一人泣いていた……。

俺は泣き疲れて、いつの間にか寝ていた。目を覚ますと、目の前にマイがいた。

「俺……。マイに情けない所見せちゃったよ……。」

「そんな事ないのよ！泣く事は恥ずかしい事じゃないから。それよ、サイガ君が目を覚ましたよ……！」

「ほ……。本当か！？良かったあ……。」

俺は立ち尽くしていた。心の中は、安堵の気持ちとサイガに対する罪悪感でいっぱいだった。俺はすぐにサイガの病室へ急いだ。

「サイガ！！！起きたのか！？大丈夫か！？」

「……。まだ痛むけど、もう死ぬことはないです……。」

俺はその場でへたりこんで泣いた。

「良かった……。良かった……。」

「何……。泣いてるんです？ミオのが伝染したんですか？」

俺は胸に溜め込んだ気持ちを、涙として全部流した。

「ライカ君……。もう泣かなくていいのよ。」

「ほら、愛しき彼女からも言われてますよ……。」「
「う……。うるせえ……。」「

サイガとマイはクスクスと笑った。すると、ミオが走ってきた。

「サイガ君！？大丈夫！？アタシの事……。分かる？」

「分かるよ……。ミオだろ？」

「寂しかったよ……。ウワアアアアーン！！！」

そう言っただけで、サイガに抱き着いた。サイガも、泣いている
ミオを優しく抱きしめた。

「フフフ……。あの二人、なかなかお似合いだね。もしかして、
このまま結婚したりしてね。」

「そうか？」

「きつとそうだよ！」

そう話しながら、俺達は病室を出た。気付けばもう夕方だった。

夕日がサイガとミオを優しく照らした。俺とマイは、手を繋いで部
屋に行った。

こんな所を思い出しただけでもはらわたが煮え繰り返るが、『破
壊組織』は、またもや騒然としていた。

「……。55号は！！？」

ゲンが怒鳴った。衛兵は、ゲンに恐れおののき言った。

「まだです！！エージェントは3人全員死亡！！次のエージェン
トを……」

「もういい！！俺が行く！！！」

「し……。しかし……」

「黙れ！！！」

そう言っただけで、拳銃を抜き放ち、衛兵を撃ち殺した。

「へりを用意しろ。」

周りの奴らはゲンに恐れおののき、二つ返事でへりを出した。そ

してゲンは、俺の所へと向かった……。

今日も、雨だった。鬱々とした天気、こっちも鬱々となってくる。こここのところ、5日連続で雨が降っている。

「はあ……。今日も雨かあ……。」

「そんなに落ち込まないで、ミオちゃん！こんな時は読書だよ！晴耕雨読だよ！」

「はい、そうしましょうか。」

俺は何か危ない物を感じ取った。嫌な予感がする……。

「俺、ちよつと散歩行ってくる。」

「え？こんな雨なのに？」

「ああ、ちよつとな。」

「変なの……。気をつけてね！」

俺は雨の中、街を歩いた。特に買い物をする訳でもなく、ぶらぶらと歩いていた。すると、何処からか戦車が走る音がした。要塞のように、巨大な戦車だった。人々は逃げ回り、パニックになっていた。

「まさか……。」

俺は凍りついた。それには、『破壊組織』の紋章が付いていた。

明らかに、俺を狙っている！！俺は戦車の上に飛び乗り、チェーンソーで主砲を叩き切った。主砲は大きな音を立てて地面に落ち、俺は更に畳み掛けようとした。

「オラアアアアアアアア！！！」

俺は叫びながら戦車を叩き切るうとした。

『退却する！これより退却する！』

しかし戦車は逃げ、俺は静かになった街に一人取り残された。俺はずぶ濡れになりながら、戦車を追いかけた。

「待てええええ！！！！」

しかし戦車は、戦車とは思えない速さで退却した。

「ハア、ハア、ハア……。」

俺は、そのまま家路についた……。何故だ……。あの戦車には何故ゲンが乗っていたのか……。あいつが死ねば、組織は壊滅する。最終決戦なのか……。奴らも切羽詰まっているのか？

「面白れえ……。やってやるよ!!!」

俺は覚悟を決めた。もうここまで来たらやってやる!!!

俺が診療所に帰って来ると、3人は俺を見て驚きを隠せなかった。

「ラ……ライカ君、どうしたの!? そんなにずぶ濡れで!!!」

「奴らが……来た。」

「もう嫌よ!!! ライカさん、なんとかならないんですか!!!?」

「奴らと……戦うしかない!」

「そんな……。もうライカさんとサイガ君が傷つくのは嫌よ!!!」

「いや、奴らを壊滅させるチャンスはある!!!」

「チャンスって……。何です? 俺にも出来るんですか?」

「落ち着け! サイガ。これは奴らを倒す最後のチャンスだ。よく聞け。」

「最後のチャンスって……。どういう事ですか!?」

「失敗すれば、俺らは確実に死ぬ。ただし、成功すれば、組織を確実に壊滅させる事が出来る。」

サイガは凍りついた。目を見開き、身体が震えていた……。

「失敗すれば……。死ぬ……。」

「組織のドンが、戦車の中にいたんだ! そいつさえ倒せば、組織は壊滅する。」

「でも、奴らは確実にライカさんを殺しにかかっているんだろ?」

「その通りだ。だから失敗すれば……。死ぬ……。」

暫く沈黙が続いた。皆、どうすればいいのか考えていた。しかし、その沈黙は破られた。マイが口を開いたのだ。

「アタシはライカ君の事信じてるから……。行つてらっしやい。でも、必ず生きて帰つて来てね……。」

「マイ……。」

マイは泣きそうな表情になっていた。すると、ミオも口を開いた。

「サイガ君、生きて帰つて来なかつたら、許さないからね!!!」

「ミオ……。分かつた。必ず生きて帰つて来るよ!!!」

ミオは、もう泣いていた。苦渋の決断だったに違いない……。

「ライカさん。俺、ライカさんと一緒に行くよ!」

「サイガ……。」

俺は胸が熱くなった。そして、俺はサイガを抱きしめた。

「……。うわっ!!!」

「ありがとう……。」

俺はサイガから離れると、泣き出していた。

「皆……。本当にありがとう!!!」

「何言つてるの?ライカ君……。お礼を言うのはアタシ達の方だよ。ライカ君のおかげで此処まで来れたんだから……。」

そして、マイは俺を抱きしめた。

「大好きだよ……。ライカ君……。」

俺は泣くのを止め、マイの頭を撫でてあげた。

「マイ、ミオ。行つてくるよ……。」

そう言つて俺達は、診療所を出た。

「待つて!!!ライカ君!!!」

「もう行くの?サイガ君……。」

しかし俺達は、振り返らずに雨の中を歩き始めた。これがお別れになると思つと、嫌だった。

「マイ、必ず生きて帰つて来るからな……。」

街は騒然としていた。市場は荒らされ、人々はバタバタと倒れている。組織の奴らは、一般人にも容赦なかった。

「酷え……。」

俺達が暫く歩いていると、あの戦車が見えた。

「あれだ……。行くぞ、サイガ!!!!」

「はい!!!!」

戦車の周りには、衛兵がうじゃうじゃといて、正面突破は困難だった。

「殺しますか？」

「それしかないだろう……。行くぞ！」

俺はチェーンソーを振り回し、サイガは大きな腕を振り回して突入した。

「ウオオオオオ!!!!」

俺達は雄叫びをあげながら、敵を蹴散らしていった。衛兵は、全員死亡した。これで、突破口が開けた。俺達は、戦車の中へ突入した。

戦車の中も、衛兵で溢れていた。しかし俺達は、衛兵を殺さず、尋問をしていた。

「くそ、ゲンは何処だ!？」

「……。一番奥の、指令室だ……。」

「そうか。」

俺は、衛兵の首を切った。衛兵は、苦悶の表情で死んだ。

「指令室へ行きましょう!」

「ああ。」

俺達は、指令室へと急いだ。これで決着がつくと思うと、俺達の足は速まった。衛兵達は薙ぎ倒し、俺達は傷一つ付かずに指令室へ向かう事が出来た。

俺達は、指令室にたどり着いた。そこには、ゲンが銃を構えて立っていた。

「55号。やっと戻って来たか。」

「黙れ！！！！もうあんたの部下ではない！」

「ほほう、ならば……。」

そう言っただけで、俺の腹を銃で撃った。俺は吹っ飛び、ガクリと倒れた。

「ライカさん！！！」

「小僧、次はお前だ！」

ゲンはサイガに銃を向けた。しかし、銃は真つ二つに割れ、虚しい音をたてて落ちた。

「終わりだ！！！」

「ば……馬鹿な！！！貴様は撃たれた筈……。」

俺はゲンに、撃たれた所を見せた。ゲンは凍りついた。

「ぼ、防弾チョッキ……だとお！！？」

「ああ、衛兵から盗んだ物だ。」

「もう、諦める！！！」

しかし、ゲンは不敵な笑みを浮かべている。

「何が可らしい！！？」

サイガが叫ぶと、ゲンは何かのボタンを押した。その途端、アラームが大音量で鳴った。

「ハハハハ！！！！この戦車は、あと5分で大爆発する！！！！組織と共に散れえ！！！！」

俺達は凍りついた。早く逃げなきゃ……。

「サイガ！！！！早く逃げるぞ！！！！」

「はい！！！！」

するとゲンが、口を挟んできた。

「無駄だ！あと5分で大爆発するんだ！逃げられる筈はない！！」
「うるせえ！！！！黙れ！！！！」

サイガが一喝すると、俺達は走り出した。あと4分……。衛兵の屍に足をとられながらも、俺達は突き進んだ。

「絶対に生きて帰ってやるからな……。マイ……。」
制限時間はどんどん短くなっている。あと3分……。

「あとどれ位だ!?!?」

「此処を曲がれば出口です!?!!」

俺達は、角を曲がった。しかし、俺達は凍りついた。厚い鉄のドアが立ち塞がっていた。あと2分……。俺達は、精一杯頑張った。しかし、びくともしない!そうこうしているうちに、制限時間はあと1分になった。

「あと、1分。あと、1分。」

「畜生!?!!畜生!?!!」

「サイガ!?!!まだ諦めるな!?!!」

あと30秒……。すると、鉄のドアにひびが入った。

「行けるぞ!?!!サイガ!?!!」

残り20秒……。しかし、ひびは入ったが、まだ破れない。俺達は、汗だくになりながら必死に攻撃した。残り10秒……。

「ウオオオオオオオオオオオオ!?!?!?!?!」

「9・8・7・6・5・4・3……。」「

「諦めるなああああ!?!?!」

その時、鉄のドアが遂に破られた。外の光が、俺達を明るく照らした。

「やった……。」「

「1・0。」

俺達は、猛烈な爆音・爆風・閃光に包まれた。俺達は、周りが見えなくなった……。。

その頃、マイとミオも爆音を聞いた。強風が、街の郊外も襲った。マイとミオは凍りついた。

「嘘……。嘘でしょ、嘘でしょ?」

「ミオちゃん、大丈夫だよ、二人は……。」「

ミオは、マイの言葉を無視し泣きはじめた。

「イヤアアアア!?!!サイガ君!?!!サイガ君!?!!絶対生きて帰っ

て来るって言ったのにいいいい!!!」

「まだ死んだとは限らないよ!!!」

「ウワアアアアン!!!サイガ君のバカア!!!」

手が付けられない状態だ……。

「ライカ君もサイガ君も生きてる事を信じましょう。アタシ達が信じなくて、誰が信じるの?」

「でも……でも……。」

「あの二人は弱くなんかないのよ。だから、だから……。」
いつの間にか、マイも大粒の涙を流していた。

「……ゴメンね。アタシも泣いちゃった……。」

「いいですよ……。悲しい・寂しいのは一緒ですから……。」

「無事で……いてね……。ライカ君。」

「サイガ君……。」

二人は、祈り続けた。どうか無事で帰って来ますように、と……。

……あれ?俺達、生きてる……?

「ハッ!!!此処は……何処だ!?!」

「気が……付きましたか。ライカさん……。」

俺達が倒れていた所は、焼け野原だった。何も無い、俺達しかない所だった。

「まさか……。」

「心配ないですよ。ほら、向こうに集落があるでしょう。俺達の間集落ですよ……。」

「早く、戻ろうか。」

「はい。ミオも、マイさんも、目茶苦茶心配していると思うから……。」

俺達は、傷ついた身体を引きずるように前へ進んだ。マイが心配していると思うと、俺の足は速まった。

「待つてくれ……。マイ……。」

マイとミオは、ただ祈り続けていた。しかし、二人は帰って来ない。それでもマイとミオは、帰って来る事を信じて祈っていた。

「お願いします、神様、どうかあの二人が無事でいますように……。」

すると、何処からか足音が聞こえてきた。

「まさか……。」

ミオは、いち早く外に出ていた。ミオは目を疑った。ライカとサイガが、戻って来たのだ!!!

「マイさん!!!来て下さい!!!ライカさんとサイガ君が……。」
二人はボロボロになりながら帰って来た。マイとミオは、涙を流していた。

「お帰りなさい、ライカ君……。」

「ただいま。マイ。」

俺は、その場に倒れ伏した。

「ライカ君!!!大丈夫!!!?」

マイは、俺を診療所へ運んだ。ここから、俺が起きるまでの記憶はない。ただ、俺が倒れる前に、サイガとミオが抱き合っていたのは覚えている……。

御静聴有り難う。此処までが、俺が語りたかった話だ。え?そのあとは、どうなったって?仕方ねえ……。話してやるよ。

俺は事実上、職を無くした。だから俺は今、近所の市場でアルバイトをしている。サイガとミオも一緒だ。マイは、俺が目覚めてから、看護師になりたいって言ったから、看護師になるための勉強をしている。あと1年勉強すれば、国家試験を受ける事が出来るらしい。

まあ、余談だが、マイが看護師になったら俺は……マイと結婚しようと思っっている。マイの方から言ってきた。俺がOKを出したら、マイは泣く程喜んでた。

おっと、マイが呼んでるから、俺はそろそろ行くよ。じゃあな。またいつか会おう……!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0970i/>

FINAL BATTLE!!!

2010年10月8日11時36分発行